『旗本三嶋政養日記』にみる幕末期中級旗本の
居住様態及び家政変遷に関する小考A HISTORICAL PERSPECTIVE ON A DWELLING AND HOUSEHOLD
OF A MIDDLE-CLASS SHOGUN'S VASSAL IN THE ENDING EDO ERA,
DESCRIBED IN "DIARY OF MASAKIYO MISHIMA, SHOGUN'S VASSAL"

谷本 潤*

Jun TANIMOTO

"Diary of Masakiyo Mishima, Shogun's Vassal" is a fine historical text, wrote by one adopted Samurai, Masakiyo Natsume who was one of the cadences in Natsume Family, inherited Mishima Family even after Mishima Family suffering from lapse of the official heirship, which is called "Matsugo-youshi" in the inheritance process of Samurai class in the Edo Era. The diary covers the years of ending Edo Era up to the beginning of Meiji Era with very detailed descriptions in the form of time-series. Because Mishima Family was classified as one of middle-class clans of Shogun's Vassal, thus had a main manor (Kami-yashiki) as well as a sub manor (Shimo-yashiki), we can follow how he did with the manors stipulated by the conventions of that time on household, family system as well as estate, which were all impacted with the revolutionary changing happened with the collapse of Tokugawa-House (Tokugawa-Bakufu). We abstract several interesting issues from the architectural (or social scientific if we like to say broadly) point of view, and discuss on those.

Keywords: "Diary of Masakiyo Mishima; Shogun's Vassal", Inside row house, dependents

『旗本三嶋政養日記』, 中長屋, 厄介

1. 緒言

小考では、旗本日記『旗本三嶋政養日記』¹⁾を基礎史料に幕末期の中級旗本²⁾の家政、付随して家族制度及び往時の社会動向に関連付け、その居住様態を具体的に論じるものである。

徳川期の旗本の日記体裁の公私記録としては正徳の治の枢機に關与した新井白石の公務日記『新井白石日記』(大日本古記録)や勘定奉行等を勤め幕府崩壊に殉じた川路聖謨の公私日記『川路聖謨日記』(日本史籍協会叢書)、川路同様幕末期にあって軍艦奉行等の要職を歴任し、咸臨丸の船将・遣米副使としても人口に膾炙している木村芥舟の『木村摂津守喜穀日記』など史上著名人のそれは数例を数え得るが、伝存する一般旗本の日記類等の記録は極めて少なく、『旗本三嶋政養日記』は希有のテキストである。同書は中級層の旗本がものした詳細な時系列形式の私的記録である点で貴重であるばかりでなく、没落する幕臣の側から見た幕末最終期から明治初年の社会動向や混乱が日常生活の背景として活写点綴されている点でも史的価値の高い記録である。研究的観点から『旗本三嶋政養日記』を取り上げたのは、碩学・三田村鳶魚に師事し徳川幕府諸制度を詳細に亘って考究した小川恭一が、旗本の相続形態等を論じる過程で、所謂、末期養子の相続(後述)が裁可な具体事例として最初に引用したのが嚆矢であろう³⁾。また、杉山容一は、この史料を追うことで、一中堅旗本の行動の軌跡から、戊辰戦争以降の幕臣団の解体、静岡藩成立から廃藩置県に至る政治的、社会的大変革の具体像を詳らかにした論考を提示している⁴⁾。

建築史学の視座を旗本に照射した先学の賢考としては、例えば、旗本屋敷の空間構成や利用形態などの変遷を明らかにした研究⁵⁾⁻⁸⁾、大名屋敷を含む拝領屋敷が相対替を通じて実質的には売買されてい

た機構を解明した研究など⁹⁾⁻¹²⁾が上げ得、渦中の建築史学者自身の謂いに依れば、研究史は必ずしも長くはない、との謙抑な総括も見えるけれど¹³⁾、着実に豊かな成果が上がっているとみるべきだろう。実際、元禄期以降、商品経済の勃興が社会に少なからぬ影響を与え始め、安定が爛熟に転じ始める江戸中期に至ると、これらの社会的胎動と幕府の旧套墨守・先例主義が様々な局面で矛盾を来し始め、江戸という膝元にあっても幕威が隅々に達し得ない事態が生じ始めていたとの史実を知るとき、幕政の綻びの萌芽が建築行政に看取できるとの意味で、前記例として上げた「時代が下るにつれて拝領旗本屋敷の実質売買が一般的になっていく経過」を明らかにした諸研究等は日本史学、社会史学的にも大きな意義があると云うべきだろう。

如上、建築史的、さらには日本史学、社会史学的背景を踏むなら、拙稿で『旗本三嶋政養日記』を読み解き、幕末期の中級旗本の個別事例としての旗本屋敷およびその居住形態を考究することは、学際的観点から必ずしも由無しとはしないのである。

2. 『旗本三嶋政養日記』

『旗本三嶋政養日記』は、家禄 2000 石の上級旗本・夏目備後守信明(外に西丸御用取次としての役料 3000 俵を受く)の庶子・芳五郎芳明が、中級旗本の三嶋家(家禄 1300 石)の第 13 代当主・政養として、第 12 代当主・政堅の急逝後の末期養子(急置養子)¹⁴⁾⁻¹⁵⁾となって相続する嘉永元(1848)年 7 月直前の 3 月 7 日から、明治 16(1883)年 9 月 10 日に至る、身近些事から家政全般に亘る委細を時系列形式で記録した編纂日記である¹⁶⁾。政養の入贅直前の三嶋家は、12 代・政堅の過去の不祥事¹⁷⁾の影響に加え相続上の混乱により家勢衰えていた。政堅の生存中に開始された政養の入贅交渉には、旗本として

* 九州大学大学院総合理工学研究院 教授・工博

Prof., Interdisciplinary Graduate School of Engineering Sciences, Kyushu University, Dr. Eng.

極官に至り幕閣中枢に連なる備後守信明の夏目家から養子を迎えることで、家勢を回復させたいとの三嶋家側の悲願が背景にあった。相続上の複雑な事情とは、政養の入贅当時の三嶋家に第10代当主・但馬守政春の嗣子でありながらのち廃嫡された政備¹⁸⁾の第4子である山鹿磯橋とその家族、第7子・山鹿徳次郎（いずれも12代政堅とは従兄弟の関係にある）が扶養家族の意味である厄介として邸内に居住していたことから窺えるが、彼らを含め男系女系複数の相続候補者があり、分家当主（三嶋政行）の思惑等も加わって、武家にとって最も重要な筈の次代相続者・嫡子（嗣子）を決められない事態に至っていたことを意味する。その只中で12代・政堅が頓死し、末期養子としての政養受け入れへと事態は急展開する。夏目家側は、政養入贅に際し、厄介・山鹿徳次郎の長屋普請金（後述）100両を含む持参金400両を差し出し、更に政堅未亡人の賄料など年間56両、山鹿磯橋、徳次郎両厄介に夫々年35両五人扶持の合力を給することを三嶋家側に約している¹⁹⁾。三嶋家にとって、夏目家から政養を賀養子として受け入れることは、家勢の回復のみならず、経済的梃子入れ（後述）の意味もあったのである。

養子相続した政養は当時27歳、以降、小普請を脱すべく、要路に運動するが、様々な挫折があり、結果的に幕臣として出世が確実な主要役職に就くことが出来ず、幕末の混乱期に至る。鳥羽伏見の戦いに始まる戊申戦役では江戸市中は市街戦の可能性から混乱を来すが、このような中、政養は彰義隊と官軍との上野戦争（慶応4年5月15日（1868年7月4日））に先だって、厄介を含む家族、家来、使用人を本邸から上総にあった知行地の一つに疎開させる措置をとっている。幕府瓦解の後には、静岡に移転した徳川宗家を追って自らも移転することは主家の経済的負担になると考え、と云って新政府に帰順する（朝臣となる）ことも徳川家への忠誠心から出来ず、一旦は士籍を失うと云う当時の直参旗本としては蓋し忍び難き屈辱を甘受してまで、知行地の名主らの助力を得て帰農するのだが、それも旨く行かず、その後、東京と称されるようになった江戸に戻って菓子屋経営に乗り出すも、典型的な武士の商法でこれにも失敗する。結局、徳川家の静岡移転にやや遅れ、政養は一家をまとめて東京での生活に見切りを付け、明治3（1870）年既に家督を譲っていた嫡子・政明に静岡藩への帰参を願い出させ、浜松に転居する。転居後1年経ずして廃藩置県があり、三嶋家はその後、静岡に転居するが、日記では政養死亡の3年間前、明治16（1883）年に至る迄の元・旗本・三嶋家の同地における生活が綴られている。

3. 三嶋家の拝領屋敷と厄介居住の中長屋

三嶋家には本所石原町の拝領上屋敷540坪に加え、中級旗本には珍しく本所南割下水50坪の下屋敷があった。やや旧いが元禄6（1693）年の高坪規定では1000～2000石の拝領屋敷は700坪とある¹⁰⁾から、上屋敷は家禄1300石の屋敷としては若干手狭だったとは言えるだろう。本所南割下水の下屋敷は、以下のように元々渋谷にあった屋敷を分割の上、相対替して取得したものである。手続きは正則の幕府許可を得て行われている。なお、渋谷屋敷は上屋敷と同時に相対替で求めたものである²⁰⁾。

なお、以下転載する日記原文における括弧〈〉は三嶋政養の、[]は翻刻版著編者（西脇氏）もしくは本論著者（谷本）の註記を意味

する。

嘉永四〔1851〕辛亥年

九月廿二日、渋谷屋敷切坪九方相対替願済〈松平和泉守殿被仰渡、○〔1字脱〕月〔1字脱〕日渋谷稲葉丹後守上地三百坪之内、切坪百五拾坪、小普請組酒井内蔵之助支配篠原彦六え、同五拾坪、松栄院様御侍福嶋長五郎え、同五拾坪、美濃郡代柴田善之丞手附栗原貞次郎え引渡、御儒者佐藤捨蔵屋敷本所南割下水五拾坪（数文字脱）、委細ハ屋敷沿革記見るへし）、渋谷屋敷のあった一帯は元々稲葉丹後守の広大な屋敷地だった場所で、享保10（1725）年5月の収公後、多くの屋敷地に分割された。爾来、上記に観られるように一帯を地名のように「渋谷稲葉丹後守上地」のように呼ぶようになった²⁰⁾。このうちの300坪を三嶋家では前記のように相対替で求めたが、上記に見えるように、御用儒学者の佐藤捨蔵の本所南割下水屋敷50坪を相対替で得るに伴って、篠原彦六へ150坪、福嶋長五郎へ50坪、栗原貞次郎へ50坪を譲渡している。これは、本来、売買が禁じられている（大元は）拝領屋敷（であった地）を相対替の名の下に実質、売り渡したものでろう^{8)・11)}。文面からは確固と比定しがたいけれど、篠原以下3名には完全な売却、佐藤とは等価交換したものと推量される。本所上屋敷からも柳営・江戸城や中央官衙からも遠く、粟散邊土とは言わぬまでも江戸の周縁部にある渋谷屋敷では用途もなく、狭小ではあっても本所石原町の本邸にほど近い場所に別宅地を確保し、かつ売却益を得た方がよいとの判断があったのだろう。これには、夏目家から入贅相続した政養の、三嶋家の健全な財政運営をはかりたいとの、あるいはそうさせたいと念じた実父・備後守信明の思惑²¹⁾が大きく影響したと想像される。

本所石原町の本邸は12代・政堅が天保12（1841）年に相対替により得たもの（後述）である。図1は政養死後の明治43（1900）年に政明が描画した図面を西脇が再構成¹⁾したものである。この図面は、後述する安政2（1855）年旧暦10月2日（11月11日）の所謂、安政大地震で倒壊した母屋を翌年再建して以降、慶応3（1867）年に至るいつの時点の状況なのか確定できない²²⁾が、この時期前後の家屋構成が推定できるため、本稿ではこれを基本史料とする。塀で囲繞された邸域内に、まず屋敷母屋165坪が配置され、母屋すなわち主殿に一部2階（9坪）部分がある。更に、門に沿って表長屋（抱え儒者宅12坪、用人宅11坪、中間部屋7坪）があり、母屋に沿って、中長屋（山鹿徳次郎宅13坪、山鹿孫之丞（磯橋の子息）宅10坪、別当宅7坪、厩・物置等5坪）があり、建て屋総延べ床239坪（畳数236畳）であった¹⁾。この本邸内の居住者は時期により異同はあったろうが、慶応3（1867）年時点で、母屋に政養家族7名、使用人9名、家来4名の合計20人が、表長屋と中長屋には厄介およびその家族、用人、抱え儒者を含む家来およびその家族、中間等合計15名、総計35名が居住していた。政養が入贅時に夏目家から手当てされた持参金の内100両は山鹿徳次郎普請金とある¹⁹⁾が、図中の中長屋の建設費用に充てられたのは定かでない。

安政元〔1854〕甲寅年

同〔十月〕廿六日、表長屋新規普請〈牛込築土町大工友次郎〉、請負申付ル〈金百五拾両、十一月十六日仮囲見分、竹垣三右衛門手代式人、本所見廻役田中五郎右衛門相越、同十八日手

図1 三嶋家本所石原町本邸の慶応3(1867)年時点の平面図。

文献1)より転載。画面下方が方位北、西方向(即ち画面右方)520mで大川(隅田川)に至る。

始、同廿三日地祭、梅本大和、廿四日建前、十二月二十五日皆出来、

十二月廿二日、本所南割下水邸、〈小笠原順三郎支配〉津田内匠え貸地順済(但、山鹿徳次郎住居之積ニて、家作取建候へ共、不弁(二付止)、

同〔十二月〕廿五日、表長屋普請出来、門開内祝、

上記の記述からは、図にある表長屋を150両で新築したことは疑義ないところだが、12月22日の記述からは、前記した南割下水の下屋敷中に家作に転用することも含み置いた山鹿徳次郎に供する住宅を建てる費用に上記100両が充てられたのかも知れない。或いは、前記の表長屋新築費用に転用されたのかも知れない。何れにせよ、ここでは、上記した嘉永4年からわずかに3年後の安政元年には、相対替で入手した南割下水の下屋敷50坪を、家賃収入を得るため津田内匠に貸与している点を確認しておきたい。渋谷屋敷は切坪によりその多くの所有権を実質的には金銭譲渡したと推量されるが、相対替により求めたこの南割下水下屋敷だけは、拝領屋敷の実体が消失してしまう為、あからさまな売却は出来なかったのだろう。が、貸し地と謂いながら、維新直後の上屋敷本邸の譲渡手続きが日記後段に詳細に述べられている(後述)のに比して、南割下水下屋敷のそれへの言及がないことから、実質上は譲渡に等しいものだったことは想像に難くない。松山が詳しく論証⁷⁾しているように、賃貸収入を得るために、旗本拝領屋敷に、類縁者、家来や使用人以外の他者

(基本的には武家)を住まわせることは当時珍しくなかった。ここで述べた南割下水の下屋敷の運用に関しては、厄介を住まわせ、同時に家作を第三者に賃貸しすることを当初は考えていたようだが、結局、屋敷丸ごとを第三者に賃地名目で事実上譲渡していたのではない²³⁾。渋谷屋敷の相対替同様、拝領屋敷の実質譲渡に関する事柄と推量されるため、私的日記ながら貸与額等の情報は記載されていない。宮崎¹⁾が指摘するように、幕府への正規手続きを経た相対替は文政年間(1820年代)以降年間200件を越え、幕末期に至るほど急増していく。この少なからぬ内数が、本事例のように相対替に名を借りた実質拝領屋敷の金銭譲渡であったのではないかと推量される。

さて、ここでは連棟形式の中長屋、厄介・山鹿徳次郎と厄介・山鹿孫之丞の住居に注目しよう。山鹿孫之丞は政養入賀後4年して死亡する山鹿磯橋(前出)と彼の内妻はつとの子息の一人である。

嘉永五〔1852〕壬子年

三月四日、山鹿磯橋病死、法名法受院、葬宗柏寺(宗吾日理居士、十月初七日法事)、

六月廿二日、山鹿(磯橋死、次男)珊三郎、(庄内藩)富樫善蔵為養子(縞縮緬一反、越後縮一反、(1字脱;おそらく「真」)岡木綿一反、転「博」の誤りか)多帯地一、其外縮緬練帛地、大小取出金三両、腹はつえ金式両遣之、六月廿八日引移、○干時、珊三郎四歳、腹はつ庄内家来加藤喜蔵妹、富樫善蔵ハ

はつ妹聳、珊三郎ニは叔母聳也、右之縁ヲ以内談整)、

同 山鹿磯橋〈死〉跡始末〈妾はつ子供孫之丞・お兼・珊三郎、右三人也、借財凡金七拾両四拾貳口程、右を引請、お兼ハ奥え引取追て養女積り、孫之丞ハ徳次郎賄金四拾六両・六人扶持ニ増、徳次郎引請、はつ八月捧〔「俸」の誤りか〕拾匁ツ、可遣筈取極、七月より磯橋合力金ハ止)、

六月廿六日、山鹿於兼、奥え引取、

以上の関連記述を日記から拾うと、三嶋家の当主として政養は、残された山鹿磯橋の家族のたつきの立つように十全の配慮を為しているように思える。次男を養子に出し、長男（第3子）の孫之丞を厄介として引き続き邸内に留め、当面、厄介・山鹿徳次郎（孫之丞にとっては叔父に当たる）に後見させている。また、長女・兼は自らの養女として、長屋から邸内に引き取り、磯橋の借財の後始末をも行っている（一方、入贅後の約定に謳われていた山鹿磯橋への合力は当人死亡により停止している）。厄介の存在を封建的家父長制の頭在事柄であると今日の家族制度から否定的に観ることは容易だが、政養の事後処理は、扶養家族である厄介に対する当主としての配慮としては当時の社会慣行上当然の範疇だったのかも知れないし、政養個人の、或いは三嶋家にあったごく自然で温順な人情の発露だったのかも知れない。何れにせよ、当主一家と広い意味での家族に含まれる厄介者の家族とが、敷地を共有した邸宅内の母屋と中長屋に分居し、あくまで垂直的家族構造の中で別火していた事実と、この拡大家族に何らかの事由で変異が生じたときには成員を養子として主殿空間に移居させる等の柔軟性をも具有していた点を確認しておきたい。また、時期は異なるけれど連棟3住戸あった中長屋を賃貸していた事実が確認できる以下の記述をみると、蓋し、殖産のため、厄介者たちを母屋内に移動居住させていた時期もあったのかもしれない。

万延元〔1860〕庚申年

六月廿六日、長屋貸福原三右衛門、〈渡辺慎之丞え隨身に付）引払、

同〔十月〕十七日、長屋貸林文吾、長屋入相違置候ニ付、今日引払、

慶応三〔1867〕丁卯年

同〔三月〕五日、長屋貸本庄弼太郎、仮抱証判〈九月廿九日、長屋引払、一類共同居)、

前記したが、松山が詳述⁷⁾しているように、当時、拝領者自らが住む「居屋敷」の一部を賃貸（所謂「貸置」）、母屋主殿に同居（所謂「同居差置」）させることで賃貸収入を得ることは珍しくなかった。上記記録は、三嶋家上屋敷における中長屋貸置を物語るものである。

4. 三嶋家上屋敷における安政大地震

M7.4 クラスの南関東直下型地震であったと推定されている所謂、安政大地震は、新暦で1855年11月11日（安政2年10月2日）午後10時ごろ発生し、江戸府内で倒壊家屋約1万5千、死亡約1万の被害が出た。三嶋家でも以下に観るように玄関回りの母屋主殿倒壊、2人圧死の大きな被害に遭っている。

安政二〔1855〕乙卯年

同日〔十月二日〕、亥中刻大地震、玄関・住居向不残潰、長屋内

外とも破損所出来候て無恙〈小者、上州西平〔1字「井」脱か〕村より出居る治右衛門、井上総より奉公出兵助、右兩人梁下ニ即死、奥女たき・すみ、女部屋梁下になるといへとも無異、其外ハ一統つゝかなく、隣佐野亀五郎空地へ退、四方出火を火を〔ママ〕ふせく、殊に奥方ハ出産九日目なり、乗物駕を出し其中に入しのく、夜明食物手あてなし、壁をうち土交りの米を鍋にて、土を掘、木の枝をもてたく、出来てのち盛る器なく、おの／＼〔くの字点〕手へ盛り、木の枝を箸に折て食す、養ハ寝巻のまゝにて、衣類は梁下に敷きたり、寒けれハ新井八左衛門の衣かりて着るに、裾・ゆきとも短し、吉田町大工内蔵を呼来り、梁を切、衣類・火事羽織を出し、漸着したるに、隣なる池へはまり落、そのかひなくぬれたり、笑ふに絶たり、やゝ火も勢ひしつまりたれハ、宮本且馬住る奥長屋へ移り、此所六畳に四畳なれと、次の四畳のかたへハ物を置、六畳一間へ上向五人、おかね、山鹿三人、量寿院女とも、益三母とも六人、拾六人程鮓をつけたることく十一月一ヶ月寝たり、表かたのものハ、庭へ畳を重ね雨戸を囲ひて当分野宿したり、扨、此朝裏酒店にて酒一樽もとめ、かゝミを抜、柄杓にてそれ／＼〔くの字点〕へのませ、小者其外其勢ひに乘し、一人当千び働をなしたり、常の火事なとゝ違ひ、世上一判〔「般」の誤りか〕の事なれハ、さし当り見舞物とてもなく、また何一つ買ふ事も能はず、其中に今井卯右衛門より心したる菜のもの品々とり揃へ、また次へとて生塩のさんまといへる魚、すり鉢へ山のこくと盛て贈りたり、おゐ／＼〔くの字点〕漸菜にあり付、山海の珍味、八百善の包丁も是にハ増さじと覚へたり、此時、経済道具悉く破損、何一つなく、鍋・釜をはしめミナ新調のものとなたり)、

被災後、被害を免れた表長屋、中長屋に移動し、人によっては一ヶ月に亘り狭小な状況で寝起きしたことなどが生々しく記録されている。俚諺に九尺二間の長屋棲まい等と謂うけれど、耐震構造への配慮が今日の如くなかった当時、宏大な主殿より小規模な長屋の方が却って堅牢な造りになっていたのかも知れない（勿論、判然としなないが建設時期の違いも、母屋倒壊、長屋無事の因なのかも知れない）。翌安政3（1856）年には、下記のように母屋主殿を工期3ヶ月余で再建している（中長屋のやや先行しての増築も行っている）。

安政三〔1856〕丙辰年

同〔六月〕十二日、中長屋続建足、厩共、〈梁式間半・桁六間）普請始、

七月廿九日、玄関及住居向、惣普請新始〈本所吉田町大工長蔵、石・材木ハ丸屋源兵衛、鳶石原町吉五郎、仙石町八百吉、左官吉岡町福松、瓦古梅下鎌田村〔1字脱〕、建具小伝馬町久五郎、画狩野宗益、屋根屋彦兵衛、木挽新次郎、畳屋卯兵衛、瓦師源次郎、○八月十日地形祭、九月十九日中英地祭梅本大和、九月廿九日住居向建前、十一月廿五日玄関及表方建前、十一月廿日住居向略出来引移、十二月廿日上棟内祝、未十二月廿七日表書院皆出来、翌廿八日書院開内祝)、

明暦3（1657）年の振り袖火事（明暦大火）以降、防災上の観点から江戸の都市再開発が進み、その過程で本所・深川地区に旗本の拝領屋敷が増える²⁴⁾。土地柄、地盤軟弱であったことも震災被害を助長したのかも知れない。何れにしろ、上流末中流クラスの旗本にあ

図2 安政3(1856)年時点の本所石原町の三嶋家上屋敷周辺の様子。
文献25)より転載。三嶋房五郎是三嶋芳五郎の誤記である(本文参照)。画面右方が方位北。図中の◆は町内組合で共同負担した番人の詰める番所。

っては、家屋倒壊の被害に遭っても震災後1年程度で再建されていた事実をここで確認することが出来る。

5. 三嶋家上屋敷の推移

図2は安政3(1856)年時点の江戸城内の詳細区画を再現した復元絵地図²⁵⁾の本所石原町の拡大図である。図1の隣地各家との関係から、図中の三嶋房五郎屋敷が、三嶋政養のそれであると推量される。安政3年は既に政養入贅後8年が経過している。政養は、10代当主・政春やそのかつての嗣子であった政備のように従五位下・諸大夫成していないので、但馬守や能登守と云った受領名や内匠頭、掃部頭の如き官途名を通称とせず、かと云って、歴代の三嶋家当主の通称・清左衛門をこの時点では名乗っていない²⁶⁾。この時点の政養の通称は夏目家時代からの芳五郎だと思われる。また、注22)に記した史料『御府内場末往還其外沿革図書十五(壹之部) 下 文久元酉年三月調 御普請方御役所控』(これは前記、絵地図²⁵⁾の底本の一つでもある)によると文久元(1861)年の三嶋屋敷の所有者として、三嶋芳五郎の名が見える。よって、図2の記載は三嶋芳五郎の誤記である。何れにしろ、三嶋家本所石原町の上屋敷の地所は本図により特定された。

さて、ここで注目したいのが地所敷地の形状である。図2と図1(注22)で述べたように正確な時期を否定しがたいが、大凡、慶応3年前後の状況を描き起こしたもの)の敷地形状は明らかに異なる。図2では、図中の三嶋屋敷地は、(図2では所有主空欄だが、前記『御府内場末往還其外沿革図書十五』によると文久元(1861)年時点では間宮鉄太郎の所有とされる地所に接している)隣地・桜井屋敷、さらに隣の佐藤屋敷とされる領域にまで接しながら南に延びる細長いエリアがある。日記に付随した諸文書類のうち「安政五年十二月 拝領屋敷絵図」には、前記したように、この屋敷地を、天保12年に元の所有者である天野小十郎の490坪余と山田六左衛門の50坪余を八方相対替を経て取得したとあり、その際の敷地境界絵図が残されている。当該図の境界を図2のそれと比較すると両者に径庭ないことが諒解される。従って、安政年間から慶応年間に至る間に、この細

長い南方に伸びた敷地の佐藤屋敷に接する三嶋屋敷側から見た先端部分を、ほぼ同面積の図2で佐野亀五郎屋敷(前記史料によると文久元(1861)年時点では佐野は転出している)とされる敷地に接する土地と交換し、図1の如く(三嶋屋敷から観て)きれいなL型敷地に区画整理したのである。

既述したように、政養は、一旦、知行地への帰農を決意するも、再度上京、菓子屋経営に乗り出す。その前後、本邸上屋敷の一部権利を売却処分する。そのくだりを以下に確認していく。

【明治元[1868]戊辰年]八月廿八日、郭外受領屋敷地御取上相成候ても、家作之儀は、出格之御慈悲を以被下候旨、達あり(此条夏中伝聞、○屋敷引払候節、最前ハ其筋立会、請取渡あり、其のちハ請取渡もなく、引払の儘なり、また朝臣願ハ受領、御藩之向ハ上地、御暇ハ帰田上地、と名の上へ認候木札を門へ打付る事也)。

旧幕臣の拝領屋敷について、太政官新政府は、朝臣願いを出しそれが新政府に認められた者に対しては其の儘の居住を認めるけれど、徳川宗家(静岡藩)と行動をとともにするか、若しくは帰農する場合には公収する(上地)との伝聞情報が政養の周囲を駆けめぐっていたようだが、喩え、屋敷公収となっても、屋敷地内の長屋等の住居用の家作の所有権は認められることが通知されたとある。この時点で、政養は朝臣の願い出もせず、一旦、土籍を離れている。従って、屋敷公収の可能性を覚悟していたと考えられる。その3ヶ月後は、下記のように菓子屋経営に乗り出す際、諸事相談に乗ってくれた関係者である桔梗屋恒三郎に170両でこれら家作の所有権を譲渡している。住宅用家作の範囲は判然としませんが、後段述べる理由から中長屋が主で、一部の表長屋が含まれていたのではないかと推量される。この時期(明治元年7月)、新政府は徳川家に対して、庁舎や官舎として転用することを念頭に、拝領屋敷は家建物全てを現況のままにさせ、土地の売買は一切厳禁、朝臣となった者以外の屋敷は全て上地(没収)すると命じているが、実際には、幕末志士転じて新政府の役人になっている者たちによる、旧大名、旗本屋敷を殆ど略奪するが如き蛮行もあったらしい²⁷⁾。

【明治元[1868]戊辰年]同[十一月]廿七日、本所南割下水

[日記のこの箇所前後関係からも、関連文書にある「明治元年十二月 売払申建家証文写」の記述「建坪百三拾八坪」からも、この記述「本所南割下水」(下屋敷)が「本所石原町」(上屋敷)の誤りであることが諒解される]上地屋舗、住居向家作、桔梗屋恒三郎え譲渡(但、売代金百七拾両也、内金式拾両請取、十二月二日売渡證文遣、金五拾両請取、残金百両為商法元立預ヶ置、六拾両ハ家作料、四拾両商法元ニ入、○此家作之儀、最前金森甚四郎え七郎左衛門・惣左衛門ヲ以金百拾両ニ内約、既ニ廿一日手金拾両取之、翌廿二日議定之管之処、四拾両来春延金之望ニ付、廿二日之議定差延中、同日伊勢屋忠助周遷[「旋」の誤りか]、桔梗屋河内同行、一覽百七拾両ニて惣望也、然ルに前件之訳故、金子多寡を以て先約破談ニ成兼候へ共、延金之望云々ニ付、若破談ニ成候ハ可譲渡旨ニて、金森家へは堀越[1字脱]を以、延金ニては不都合之趣掛合候処、廿六日迄日延ニて、廿七日金子不整破談と成、依て桔梗屋河内え譲渡と成、○河内之見込、来春売払候

ハ三陪〔「倍」の誤りか〕之売増ニ可成候ニ付、家作此儘据置、売増之節ハ増金可差贈之旨也、翌巳之三月松平下総守へ金五百両ニ売渡成、依て忠助肝煎ニて金五拾両可請取管之处、本町瓦解ニ付其儘相過候事、

この記述によれば、この時点で母屋主殿と敷地からなる屋敷は公収となっている。後半の記述によると、当初は金森甚四郎に110両で家作を譲渡することが内約されていたが、金森が期日迄の納金に違約したので、この不動産取引に同行していた桔梗屋河内（河内は屋号・恒三郎と同一人物か）が170両にて譲り受けたいと申し出た。このことを受け、結局、金森との譲渡内約は破談とし、桔梗屋に譲渡したと読める。桔梗屋は、維新直後の混乱が必ずや住宅不足を生み不動産バブルが起きると予見したのか、譲渡を受けた住宅用家作は170両の3倍で売り抜けられると豪語していたようで、実際、翌年（明治2（1869）年）3月には松平下総守（武蔵忍藩主）に500両で転売、その折り、政養が50両を貰い受けることになっていたようだが、維新後の混乱で有耶無耶になったとある。

〔明治2〔1869〕己巳年〕同〔正〕月廿五日、本所石原上屋敷、朝臣斉藤新五郎拝借を願ふ（これハ住居向家作、今暫く其儘さし置、都合によりてなり）、

上記は、桔梗屋が邸内家作を松平下総守へ転売する直前、新政府に上地された屋敷地が、旧幕臣で朝臣に転じた斉藤新五郎により借用されたとの記録である。これにより、後述するように、中長屋と表門以南の表長屋部分は桔梗屋に転売され松平下総守へ渡り、母屋主殿部分は斎藤新五郎の所有に帰すことで、三嶋家上屋敷の敷地は分割されていったのだろうと思量される。

以上小括すれば、旧幕臣の拝領屋敷で、朝臣に転じなかった者のそれらに関しては、母屋主殿と土地からなる屋敷本体は新政府に公収されたものの、屋敷付属の家作類はそれらとは別個に金銭譲渡されていた事実が確認出来る。

さて、この170両は、家作類の譲渡金額として適当だったのだろうか。宮崎¹⁰⁾の資料によると、やや時代は遡るが嘉永5（1858）年における、同じ本所の横川端の旗本・土岐氏の拝領屋敷が弘前藩津軽氏に実質譲渡された際の引料（引越越し代名目の譲渡金額）が坪単価0.31両とある。幕末期は驚異的なインフレであったが、嘉永5年

図3 『明治東京全図』（明治9（1876）年刊行）の本所石原町の旧・三嶋家上屋敷周辺の様子。
文献[29]より転載。図2同様、画面右方が方位北。

に対する慶応3年の貨幣価値の比を、仮に米1石に対する価格比から求めると、12.9%となる²⁸⁾。依って、もし540坪の上屋敷全体の譲渡であったなら、前記の嘉永5年時点の坪単価から1300両程度に換算される。このことから長屋等の家作の譲渡金額としては、170両はごく妥当だったようにも思える。これが、わずか4ヶ月後には500両で転売されている事実は、如何にこの時期直後の住宅価格が暴騰気味だったかを物語って余りあるように思われる。

最後に譲渡された三嶋家上屋敷のその後を見ておこう。図3は明治9（1876）年に刊行された『明治東京全図』²⁹⁾の本所石原町の当該区画の拡大図である。明治4（1871）年12月末に東京府全域が6つの大区と97の小区に画定された状況が表記されているから、蓋し、明治6、7年前後の情報を元にして作成されたと思われる。大きな邸宅であれば宅地区画まで詳細に示されている。図1及び図2とを比見して諒解されるように、地番(2)54と(2)53が旧・三嶋家上屋敷の地所である。つまり、元々の敷地が2筆に分割されている。図1から解るように、中長屋と門に沿った中長屋側（表門南側）の表長屋があった部分が地番(2)53として、元L字型の敷地から分離している。既述した経緯から推量すると、政養が桔梗屋に譲渡した家作とは、この中長屋と表門南側の表長屋のことで、ここが後、屋敷本体から分譲され別筆の宅地として登記された故の推移なのだろう。図2と委細較べれば明然だが、土岐家屋敷も2筆に分割されている。

斯くて旗本・三嶋家の旧上屋敷540坪は、明治になって分割譲渡されたことが明らかになった。

6. 結言

時系列形式にて整序としてもなされた記録であり、一般旗本の伝存する日記として貴重なテキストである『旗本三嶋政養日記』を読み解き、その家政、付随して家族制度及び住時の社会動向に関連付けながら、幕末期の中級旗本の個別事例としての旗本屋敷およびその居住形態の委細を論究した。

相対替により得た拝領下屋敷を実質的には譲渡していた可能性、当時の家族形態としてごく一般に存在した扶養家族としての厄介に邸内の中長屋を住居として供していた事実、安政大地震被災の様子等に触れた。

幕府瓦解後、旗本拝領屋敷が原則、新政府に公収されるに及んで、土地、母屋主殿とは別儀で扱われ、元の居住者の裁量に委ねられた邸内家作としての長屋は第三者に金銭譲渡された。このことが契機になって、屋敷地が2筆に分割されていく様子が確認された。

勘篇すれば、本稿で述べたのは、中堅旗本の一エピソードに過ぎず、ここから旧幕臣家に通有する何らかの一般的結を得る論拠を著者は持ち合わせぬし、肯綮に中るとは到底思われぬ小考を以て、多くを剔抉し得たとも思わぬ。が、没落する旧幕臣の屋敷地が明治維新前後にどう推移していったのかを考えると、日記がごく一般的な中級旗本のものとした記録であるだけに、似たような事例がまたあった可能性も必ずしも一蹴出来ないのではないかと考える。

謝辞

文献1)の上屋敷平面図の転載を快諾頂き、有益な助言を様々賜った西脇康先生に深謝致します。また、御懇篤にも著者が知らずにい

た史料を御教示の上、いくつかの誤りを指摘下さった匿名の査読者に深く感謝致します。

注

- 1) 本論は 西脇康 編著;『旗本三嶋政義日記』、ワイ・エス・ケー出版部、1987 を底本とした。
- 2) 万石未満の幕臣である旗本、御家人の総数は、時代によって異同があるが、寛文年間以降は大きく変動せず、両方合わせて2万人余、旗本だけで5千人余であった。例えば、鈴木壽の詳細な検討によると（徳川幕臣団の知行形態、史学雑誌 71 (2)、9、1962）『御家人分限帳』を典拠に宝永2年時点で、旗本、御家人合わせて22544人、『国字分武鑑』を原史料にした寛政年間の旗本総数は5205人であったと云う。このうち、後者の旗本だけに限ると、千石以上2千石未満に421人、2千石以上3千石未満160人、3千石以上5千石未満142人、5千石以上8千石未満106人、8千石以上1万石未満6人となる。総数5205家中、5千石以上が2.2%、2千石以上が8.0%、千石以上が15.5%であり、要すれば、幕臣の石高別分布は典型的なピラミッド構造だったと云えるだろう。1300石は順位で云えば、上位10%余に相当するが、石高で云えば上限の1万石とは可成り乖離がある。そこで、本稿では、仮に右高上位5%以内を上級旗本、20%以内を中級と呼ぶことにする。これに倣うと家禄1300石の三嶋家は中級旗本のクラスに、家禄2000石に役料3000俵を受けていた夏目備後守信明は上級旗本に属することになる。
- 3) 小川恭一;『江戸幕府旗本人名事典』全4巻別巻1、原書房、1989-90の別巻では、旗本の定義に始まり、家禄と役高、幕府職階との関係、官位叙任、相続形態等の諸制度を総合的に論じている。
- 4) 杉山容一;一旗本の明治維新一旗本三嶋政義の日記を素材として一、アジア文化史研究 10、東北学院大学大学院文学研究科、2010
- 5) 鈴木賢次;旗本住居の平面構成について 江戸時代中期の様相と展開、日本建築学会計画系論文報告集 354、117-126、1985
- 6) 鈴木賢次;旗本住居の都市における存在様態、建築史学 2、2-38、1984
- 7) 松山恵;幕末期江戸における幕臣屋敷の屋敷地利用と居住形態—近世近代移行期における江戸、東京の都市空間（その1）—、日本建築学会計画系論文集 545、267-273、2001
- 8) 松山恵;明治初頭における東京の住居—近世近代移行期における江戸、東京の都市空間（その2）—、日本建築学会計画系論文集 562、309-316、2002
- 9) 大貫妙子;幕末、幕臣たちの“住宅事情”、『近代国家と明治維新』（津田秀夫 編集、三省堂 発行）、230-254、1989
- 10) 宮崎勝美;江戸の土地—大名・幕臣の土地問題、『日本の近世 第9巻 都市の時代』（吉田伸之 編集、中央公論社 発行）、129-172、1992
- 11) 宮崎勝美;江戸の武家屋敷、『日本都市史入門 I 空間』（高橋康夫、吉田伸之 編集、東京大学出版会 発行）、85-106、1989
- 12) 岩本馨;紀州藩士の幕臣化に伴う江戸屋敷獲得動向、日本建築学会計画系論文集 561、285-290、2002
- 13) 例えば、藤川昌樹はその論考;近世の武家屋敷と都市史研究（『年報 都市史研究 2 城下町の類型』（都市史研究会 編集、山川出版社 発行、1994）で武家地や武家屋敷に関する研究は「活況を呈しているとはいえ、現時点では未だ個別研究の蓄積途上にあ」り、「ほとんど論争も行われていない」としている。往時から20年、個別事例の蓄積はそれなりに進んだとみるべきだろうが、大局観としては未だ当を得ている言明ではなからうか。
- 14) 嗣子を定めず当主が死亡した場合、御家断絶が基本原則であり、幕初期の絶家理由の多くがこのことに依った（例えば、『断家譜』（続群書類従完成会 発行、1969））。大名家の断絶が浪人生を生ま、社会不安を惹起する弊害が認識されるに至り、幕政が安定期に入ると、嫡子が公式に認知されることなく（大名の場合、正式届けののち將軍家御目見得を済ませていること）当主が死亡した場合であっても、急養子を認める事例が増えていった。
- 15) 本論に関連する人物の三嶋家系図を抄記する。

一 政春（10代当主/但馬守）

女

政備
(政春 第5子/能登守のち廢嫡により山鹿姓を名乗る)

政先 (11代当主/政春 第7子)

計11実子

政行 (分家当主/政春 第8子)

山鹿 磯橋
(山鹿政備 第4子)

山鹿 徳次郎
(政備 第7子)

計7実子

政堅 (第12代当主/政先 長男)

計5実子

機 (政堅 第2子 庶出)

計9実子

政養 (13代当主/夏目備後守信明 二男/入婿)

政明 (14代当主/政養 第2子)

計7実子
- 16) 西脇¹⁾によれば、底本は『日録摘要』と題され、嘉永1.3.7〜慶応3.11.13、慶応3.11.19〜明治3.12.27、明治4.1.1〜明治16.9.10の3部構成となっており、このうち後二者は政養の実子で次代当主・政明の日記の体裁でものされているが、筆跡等から政養の記した記録であると認定されている。

- 17) 弘化2（1845）年3月、酔って騎行、老中・阿部伊勢守正弘の供先を乱した罪により、西丸書院番士を免じられ無役の小普請に落とされている。
- 18) 政備は、嗣子・部屋住の身ながら11代將軍・家斉の御伽、御小姓、御小納戸として勤仕し、能登守に叙任されていたが、寛政6（1794）年に勤柄不相応として免職された。当時の慣習から、当主・10代政春は政備を廢嫡にせざるを得ず、以降、政備は三嶋姓を改め山鹿姓を称し、厄介の身分で一生を過ごした。三嶋家の顔運は前項で述べた12代・政堅以前から萌していたのだ。
- 19) 日記の冒頭部分、政養が三嶋家を正式相続して屋敷入する前の日付で以下の記述がある。

嘉永元〔1848〕壬子年

- 六月、政養養子ニ付、約定之廉（土産金四百両、此捌方金百両厄介山鹿徳次郎普請金、金五拾兩ハ、浅岡栄太郎妹おれん、〔以下略〕）、賄及合力〔御前様御賄料一ヶ年金三拾五兩、奥方化粧及衣服料一ヶ年金貳拾壹兩、〇山鹿磯橋合力金、壹ヶ年金三拾五兩・白米五人扶持、〇山鹿徳次郎同断、右、三嶋六郎・同小太郎・池田新之助印紙ヲ以約定）、
- 20) 『相對替御書附書拔 天保12（1841）年7月3日の条』（『東京市史稿』市街篇39）によると、三嶋家の渋谷屋敷は、本所吉田町、下谷向柳原、谷中三崎御切手町屋敷と引替に、本所中ノ郷松倉町、本所石原屋敷（本論の上屋敷）と同時に獲得したことが確認できる。この事実と、渋谷屋敷の一帯を指して「稲葉丹後守」と称していた点は匿名の査読者より教示賜った。
  - 21) 日記に付随した諸文書類に「嘉永元年7月13代政養への御諭書」がある。これは西脇¹⁾によると、入聲に際し、実父・備後守信明が与えた5ヶ条の教諭であり、第1条に「〔前略〕家督御礼申上候迄之間は、格外之儉約致し、（1300石のうち;谷本 註）八百石ニて暮しを附、五百石ハ借財方ニ向ケ、家来等も厳敷減致し、（以下略）」とある。渋谷屋敷相對替の金銭授受記載に関し、史料は沈黙しているが、斯様の前後関係から、譲渡益は三嶋家の借金返済に充てられた可能性がある。
  - 22) 図1は以下の理由で正確にいつの時点の状況図なのか確定できない。政明の記憶を元に「安政大地震後に再建なった本邸の慶応年間頃の様子」との大きな設定で絵図化されたものではないだろうか。安政大地震後の本邸再建は安政3（1856）年である。図中に描かれている二階部分は政養の隠居所として慶応3（1867）年1月28日に竣工したものである（政明の家督は翌日1月29日）。また、用人・米沢桃輔（図1中の表長屋に居住していることになっている）の雇入れは慶応3（1867）年2月10日である。一方、〔御府内場末往還其外沿革図書十五（壹之部） 下 文久元酉年三月調 御普請方御役所控〕に依ると、文久元（1861）年時点で図1中にある東隣の佐野亀五郎は既に転出し、東隣は三枝勇太郎の、東寄り南隣の敷地（図2参照）は（図1では佐野亀五郎となっている）間宮鉄太郎の拝領屋敷になっており、隣地の情報と邸内のそれとが矛盾する。さらに、図1では北隣地は五所与五兵衛となっているが、上記史料によると五味與五兵衛が正しく、翻刻時の誤記かと思われる。このように図1は正確な時点を設定できない等問題を含む図面である。が、本稿では、そのことよりもこの時期前後の邸内の詳細な様子が再構されている点を重く観て基本史料とした。
  - 23) 安政元年以降に以下の記述を認める。

文久三〔1883〕癸亥年

- 二月朔日、割下水邸組合頭取心得候様達（御目付大井美濃守・京極能登守）、
- 〔明治元〔1868〕戊辰年〕七月廿八日、南割下水辻番請負炭屋卯兵衛、番人引払之儀を願ふ、
- 前記は下屋敷周辺の番所管理などをする世話役を政養が目付・大井美濃守と京極能登守から命じられたこと、後者は幕府崩壊後その番人小屋管理の下請け町人から管理契約を解消したい旨申し出があったことを記録している。

- 以上の事実から、実質上の譲渡であったとしても、幕府への届け出上、管理義務を負う所有権はあくまで三嶋家にあったものと推量される。
- 24) 宮崎勝美¹¹⁾によれば、明暦大火を受け、1690年代に本所・深川地区の大規模開発が成果を觀、ここに多くの中級・下級幕臣の屋敷地が与えられた。
  - 25) 児玉幸多 監修、吉原 外編集・制作;復元・江戸情報地図、朝日新聞社、1994 による。同資料は複数の史料を参考に安政3（1856）年の江戸とその周辺の地図情報をまとめたもの。
  - 26) 政養が通称を三嶋家世襲名の清左衛門に変えたのは、以下の記述に観るように慶応2年である。世襲の通称とは、例えば、著名幕臣の家名で云うと、近藤登之助家の「登之助」や檜の半蔵こと渡辺守綱で有名な渡辺半蔵家の「半蔵」などがある。

慶応二〔1866〕丙寅年

- 二月十二日、芳五郎、清左衛門と改名願濟（稲葉兵部少輔贈御覺書を以被仰渡候段、預り組岡部日向守達、〇これもとく不改むべきを何かな（「の」の誤りか）折にと思へき事、因修（「習」の誤りか）に及ふ、今隠逃の志により、代々の名つたひ踏か為、爰に改む）、
- 27) 鈴木博之;都市へ（シリーズ 近代の日本）、中央公論新社、1999
  - 28) 小野武雄 編著;江戸物価事典、展望社、1979 に依り、嘉永5年と慶応3年の兩年々末（12/25）時点の大坂堂島の米市場における肥後米、加賀米、筑前米の平均価格の比から算出した。
  - 29) 国立公文書館;デジタルアーカイブを底本とする『明治東京全図』（明治9（1876）年刊行）。

（2013年11月5日原稿受理、2014年1月24日採用決定）